1998年　2月15日発行（隔月刊）

う　羽　化　か

1998年 2月
第 6 号

横　浜　漢　点　字　羽　化　の　会
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105　Tel 045-641-1290
発行責任者　代　表　岡　田　健　嗣
編集責任者　宗　助　悦　子

テーマ：『私にとってボランティアとは』

目　次

連載「EIBRK 漢点字変換システムについて」(6) ・・・・ i (中央)
テーマ：「私にとってボランティアとは」 ・・・・・・・・ 1
連載「点字から識字までの距離」(5) ・・・・・・・・・・ 11
ご報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
連載マンガ「となりのシロー君」(5) ・・・・・・・・・・ 15
形成文字をつかめば漢字がわかる ・・・・・・・・・・・ 19
同報通信『雑談』より　4 ・・・・・・・・・・・・・・ 23
漢点字ってどんな字？　5 ・・・・・・・・・・・・・・ 25

テーマ『私にとってボランティアとは』

今回のテーマは、かなり難しい内容になってしまいました。しかし、本会のような活動をしていく上で、避けては通れないテーマだと思います。「ボランティア」という定義について結論は出せませんが、今後も考えていきたいと思っています。

ボランティア〝私〟論

代表　岡田　健嗣

一

本会は、〈ボランティア〉として活動するグループである。であるなら、この〈ボランティア〉について、一顧してみなければならない。

従前のボランティアを問う前に、本会の活動を振り返って、自己分析から始めることにする。

本会の成り立ちと目的は、『漢点字』の普及を図ることにある。その方法として、『漢点字』で表記された資料を作成することを選んだ。その理由は、『漢点字』を「読む」ための触読文字と位置付けるなら、「読むべきもの」がなければならない、という当然といえば当然の結論によっている。

日本語を母語として生まれて来た者であっても、その読み書きにおいて日本語の表現を獲得することなく生活して来たこれまでの視覚障害者に、故川上泰一先生がこの『漢点字』をもたらした。一九八〇年代前半の盲界誌（視覚障害者向けの点字誌）には、『漢点字』の発表に触発された視覚障害者の文字への渇きが、如実に反映されている。各誌はあらそって「漢字」の特集を組んだのである。あるいは、点字出版所や点字図書館では、漢字のパターンを浮き出させて触知できるよう配慮された漢字の解説書の製作なども試みられた。

川上先生の『漢点字』の通信教育にも、多数の希望者が殺到した。先生は午前三時より前に床に就くことはなかったという。

しかし、その熱も急速に冷めた。その理由として、「『漢点字』の著作権問題」（川上先生がその著作権を主張され、『漢点字』のコンピュータへの搭載に制限を加えたとされることを指す）が挙げられるのが通説である。が、私にはそれ以上に大きな要因があるように思われた。それは、川上先生の言われていたように、『漢点字』を「読む」ための「文字」として、視覚障害者は受けとめることができなかったからなのだと。

川上先生にやや遅れて、筑波大附属盲学校の長谷川貞夫氏が、「六点漢字」を発表された。これは、漢字の音訓をかな点字の読みに当てはめて符号化したもので、氏の言うところでは、「読む」ためのものではない。コンピュータで、漢字をかな漢字変換ではなく、キーボードから直接入力するための点符号だ。これもまた、視覚障害者が「読む」ということを受けとめ損ねた大きな要因ではなかろうか。パーソナル・コンピュータの急速な普及によって、聖域であった「書く」ことをほぼ手中に収めて、そうして満足したのかもしれない。そして『漢点字』習得者の中にも、それを「読む」ためではなく、「書く」ための符号として使用したいとする要望が強まっている。現在では、「読む」ことを第一の目的として『漢点字』を学ぼうとする者は、極めて少ない。

本会は、このような情況下に一歩を踏み出した。

二

視覚障害者（ばかりでなく、他の身障者も同様であろうが）に読書や行動の機会が与えられたのは、さほど古いことではない。産業革命の進行に伴って、身分制が崩壊し、大衆の成立と近代自我の芽生えがあった。それが不可避的に視覚障害者にも押し寄せて来たのだ。それは、読書や行動の機会へと開かれて行く流れにもなった。前近代を引きずりながらも、その大衆の中に組み入れられつつ、一個の人間であることを求められるようになったのである。

ボランティア活動も、そのような情況下におこった。以下に、二つの資料の抜粋を掲げてみる。これが一般的なボランティアの定義と見てよいのだろう。

《（前略）一般に、保健、福祉、教育などの事業や活動に対して、自発的、自主的に無償の奉仕活動をする人々をさす。（略）ボランティアは、その活動が自発的ないし自主的であること、無償の活動であること、活動の継続が期待されること、その活動には時間的にも労力的にも自己犠牲が伴うことなどがその不可欠の要件とされる。（略）最近では、とりわけ、在宅の対象者の真のニーズを対等な関係性のなかで充足するために有料で介護する「有償ボランティア」とよばれるものが出現している。有償によって合理的かつ対等な関係を確立することはきわめて重要だが、有償を超えてふたたび無償で、しかし自己否定を通じて、従前のボランティアの問題性を払拭しえた新しい関係性を地域のなかでいかに創出していくかが今後の課題となろう。

（渡辺益男）》　（『日本大百科全書』　小学館）

《（前略）ボランティア活動は、政策主体としての国家の活動よりも、市民・大衆の自発性にもとづく活動を高く

評価するボランタリズムの思想に支えられており、個人の自由と独立を尊重する近代社会において出現し発展してきたものにほかならない。近代社会の中に生成した貧困問題、老人問題、障害者問題、児童問題などに対して、19世紀以来、主として民間社会事業家およびボランティアがその解決に努力してきたが、その限界が明らかになるにつれて、こうした社会問題に対する国家の機能が重要な意味をもつようになった。20世紀の前半は、社会福祉の政策化の時代として、公的責任の強調、制度化、有給職員化がすすみ、専門職制もしだいに確立してきた。しかし他方で、制度の不完全な部分を補完するという点で先駆的な役割を果たしてきたボランティア活動が、20世紀後半にはあらためてその意義を評価され、その重要性が問われるようになってきた。（後略）（庄司洋子）》

（『世界大百科事典』　平凡社）

両者とも概ね〈活動が自発的ないし自主的であること、無償の活動であること、活動の継続が期待されること、その活動には時間的にも労力的にも自己犠牲が伴うこと〉（前者）をボランティア活動の要素と考えているようだ。そして前者では、〈有償を超えてふたたび無償で、しかし自己否定を通じて〉、「ボランティアと真のニーズを持つ対象者」との対等な関係性の「創出」が肝要だと言っている。後者では、ボランティア活動は〈市民・大衆の自発性にもとづく活動を高く評価するボランタリズムの思想に支えられており〉と分析し、国家とは一線を画する自発的な活動をその根拠に挙げている。そして、ボランティア活動の主な役割を、〝制度〟の補完にあったと結論付け、そのことが今日また意義を持ってきたと言っている。

しかし、このような単文では、ボランティア活動の担い手や、その対象者と彼のニーズについての言及は十分なされていない。あの関西大震災の際や日本海重油流出事故などに活躍したボランティアも、NGOや世界の戦場に身を投じるボランティアもある。そうかと言えば、「うちの商売なんざあ、利が薄くてボランティアみたいなものですよ」などと使われる言葉でもある。

そこで以下では、本会の活動にしぼって、一般論には届かずとも、ボランティア活動の位置を考えてみたいと思う。

三

本会の活動の対象者の、読書に関する境遇について述べてみる。彼（モデルは筆者と考えていただいてよい）が書物を手にする場合、必ず幾つかの工程を経ている。書店で活字書を購入し、点字図書館、ないしはボランティア団体を通して点訳あるいは朗読のボラン

ティアの方に点訳、あるいは音訳していただく。できあがった点字書、あるいはテープ書をその費用と交換に受け取る。彼はそれを「読む（聴く）」のである。

一九七〇年代以来、ボランティア活動が盛んになって、この環境は大きく変化した。また、技術革新の著しい進歩によってか、カセットテープの普及は、録音のコストを大幅に引き下げた。これも、朗読ボランティア活動の活発化に拍車をかけた。それ以前は、点字図書館から、「点訳奉仕者」や「朗読奉仕者」が点訳書や朗読テープ（オープンリールによる）を製作して、点字図書館等に所蔵されているものを借用していたが、個人のニーズにも応じようという考えの定着が、読書の幅を広げたように感じている。が、所詮点字は〝かな〟であり、朗読テープは〝文字〟ではない。そのもどかしさは、澱のように何時も沈み込んでいた。

彼にはもう一つ抱えるものがあった。つまり、「ボランティア活動」によらなければサービスは受けられないのか？ということである。予想をしながらも、何社かの書店、出版社に電話をしてみた。「視覚障害者向けの書物を出版される予定はありませんか？」「はあ？それは点字図書館などにご相談下さい。」

予想通りであった。視覚障害者は、書店、出版社の顧客ではなかった。権利やニーズではなく、経済的な需給関係がその帰趨を握っていることを思い知らされたのだ。

さて、ボランティア活動の視点から見るとどうであろうか。

七〇年代以降、すなわちあの高度経済成長期以来、ボランティア活動を志望される方が急増した。「心の充足を求めて」という解釈が一般的ではある。しかし、暇に任せて参加しておられる訳ではない。自らの時間の中にこの活動を組み入れながら参加して下さっているのだ。

もしここで、私なりに将来のボランティア活動をイメージするとすれば、できうる限り「自己犠牲」を軽減する方向を摸索することに尽きるように思われる。資本主義経済において商品化されない財やサービス、しかも国家や自治体からも提供されないそれらを、現在のボランティアは担っているのだ。しかも本会のように、在来とは異なる活動を志向する者は、パイオニアでもなければならないのである。

そして大変残念なことに、本会の活動には、福祉や教育の専門職の方は、現在のところご参加を見ていない。

私にとってボランティアとは

会員　木下 和久

私の小さい時の夢は、科学者になることでした。科学者になって、できればすばらしいものを発明したり、発見したり…。つまり、ニュートンやアインシュタインが頭の中にあったのでしょうね。でも、だんだんに世の中のこと、そして自分自身の能力が分かってくると、発明とか発見とかがいかに難しいものかということがはっきりしてきます。

学生時代は、何といっても自由な時間がたっぷりあって、好きなことに没頭することができました。化学実験に夢中になったり、鉄道模型を一生懸命に作ったり、ラジオを組み立て、アンプを組み立てて、時には人のために電蓄（こんな言葉は、今では死語ですね、これ、「電気蓄音機」の略です）を組み立ててそれをアルバイトとしたり。これらは、そのときどきの「趣味」でした。しかし、会社に入るとそういう自由な時間はなかなか取れません。ずっと長いこと、週休はたった一日でしたから。

それでも、会社で製造技術の仕事をし、その後で研究の仕事をすることができたのは、一面では好きなことを仕事にすることができたということで、小さい時の夢の一部が実現できたのだと、今では納得しています。

しかし振り返ってみると、これは「科学者」とはちょっと違ったもののようです。天文学や物理学の研究の道に入っていればよかったのかもしれませんが、そのような道に進むには、いささか能力が足りませんでした。

そして現在、いわゆる勤務から開放されて、「毎日が日曜日」ということになると、これこそ我が世の春です。いくらでも好きなことができる…はずでした。あまりにもやりたいこと、やらなければならないことが多すぎて、それらのことに優先順位をつけなければならず、一向にヒマにならないのが現状です。

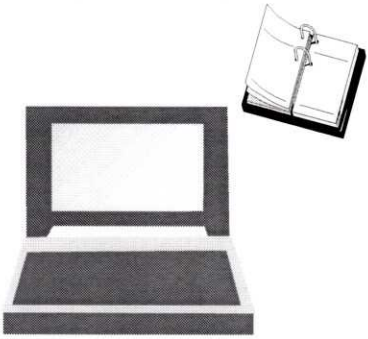
忙しすぎる原因の一つに、このボランティアの仕事があります。ボランティアって何でしょうか。本来は自発的に社会的に有意な仕事を、報酬を当てにしないでやることだと思っています。しかし、どうもこの世の中、「自発的に」だけではすまないようですね。町内会の仕事しかり、民生委員の仕事もそうです。引き受け手がないから是非、と頼まれて仕方なくやっているというのが始まりです。しかし、実際にこれらの仕事をやっていると、仕事に慣れることと同時に、その関

係の人と人とのつながりができてきます。そうなってくると、自発的であろうが、そうでなかろうが、仕事の中にそれを成し遂げることに対する充実感が感じられてきます。それにしても、その仕事の中身が自分の好きなことと結びついていることは、本人にとってとても幸せなことだと思います。

「羽化の会」との関わりが、まさにそれで、この二年間本当に充実した時間を過ごすことができました。パソコンの醍醐味は、プログラム作りにあると思います。せっかくプログラムを作っても、それを使ってくれる人がいなかったら、何にもなりません。漢点字変換のプログラムを作って、いろいろな人から注文がついて、それにしたがってプログラムを改良して行くというのは、確かに大変なことですが、その成果が誰かの役に立つというのは、本当にありがたいことだと思います。私自身にとっての成果は、このプログラム開発によって、QUICK BASIC というプログラム言語を思う存分駆使することができるようになったということです。次の段階としては、早いところ WINDOWS のプログラムを思うように作ることができるようになることです。それにはまだ時間が足りません。

「ボランティア」ってヒマ人のやることでしょうか？ そうです、でもちょっと違います。たしかに、やたらと忙しい現役のビジネスマンがボランティアをやることなんてむずかしいことです。羽化の会の皆さんを見渡してみても、それなりにボランティアをやるだけの余裕を持っておられるようですが、本当のヒマ人なんておいでになりそうにありません。皆さん結構忙しいのです。本当のヒマ人は、ボランティアをやる意志も持ち合わせていらっしゃらないようですね。

ボランティア活動を通しての人とのつながり、これまた勤務を持たない身にとって、とてもありがたい副次的な成果だと思います。特に、女性の方たちにとってもそうではないでしょうか。羽化の会の中には、魅力的な方がたくさんいらっしゃいます。これらの方たちといっしょに仕事をして行くということは、何と楽しいことでしょうか。



わたしにとってボランティアとは
…林さんの思い出…

会員　小倉　通男

光なきひとのこころにともしびを
　かかげむためにわれは生きなむ

このつたない歌はうら若き頃の私の心に刻み込まれた思いを託したものなのです。この歌が今回のテーマとどの様に結びつくかをご理解願うためには恥ずかしながら私の若かりし頃のお話を申し上げねばなりますまい。

それは私がまだ三十才になるかならぬかの青春真っ盛りのころでした。

軍隊帰りの私は病い知らずの強健な身体に任せて働きました。戦後の民生産業再建の一翼を担う心意気と言いましょうか実にがむしゃらに働きました。

ところがある日、担当していた建設の現場で全く突然倒れてしまったのです。早速入院。とにかく左半身が全く利かないのです。意識も薄れていたようでした。後で聞いた話では東大のK博士に来て頂いて診断を仰いだが脳出血は間違いないがこんな若いひとの症例は見た事がないとのことで、これといった手だてもなかったのでした。（今でしたらCTとか脳外科手術がどこでも普通に行われるでしょうが）

問題は左手足の麻痺の回復です。とにかく脳の出血をまた起こしては大変と医師も看護婦も「絶対安静」を強調するばかり。今の医学では筋肉の萎縮を防いで出来るだけ早く動かすことが大事とされているそうですが。

やがてマッサージ治療が行われるようになりました。当時としては最後の治療手段だったのです。ここで登場して見えたのが私にとって命の恩人「林さん」と言う全盲の鍼灸師の方でした。それこそ実に熱心に私の萎えた手を、そして足をマッサージしてくれました。「それが商売じゃないか」といえばそれまでですが、林さんの態度は商売を越えて全身全霊をマッサージという自分の天職に打ち込む意気込みが感じられ、「どんなことをしてでもあなたを治してあげる」と言って一日二回、日によっては三回治療に来ると言う熱心さ。筋骨たくましい腕で私の萎えた手や足をいとおしむように撫でたり動かしたりしては「小倉さん、頑張れよ。必ず治るからな」と励ましてくれました。この林さんの熱意と誠意。最近よくインフォームド・コンセントという言葉が医学界で云々されていますが、そんなし

やれたことより患者としては林さんのような熱意と誠意をこそ願っているのだ。と私はこの頃つくづく思うのです。

林さんの渾身の努力にも拘わらず私の回復はあまり芳しいものではありませんでした。担当医は「これ以上病院としてやることはない」とて自宅療養となりました。当時私の自宅は横須賀でした。そのころ鶴見から横須賀の私の家まではオンボロの京浜急行電車で一時間半はかかりました。林さんは「乗りかかった舟だ」といって私の家まで毎日、雨の日も風の日も治療に通ってくれました。そのうち林さんと私はマッサージ師と患者と言う立場を越えて兄弟同様の間柄になりました。林さんが私より一つ年上だとわかって「兄弟分の盃を交わそう」などと冗談を言い合ったこともありました。林さんが音楽好きだというので、たまたま横須賀の映画館にかかっていたシューベルトの音楽映画にお連れしたことも今となっては懐かしい思い出です。

そうこうしているうちに私の半身麻痺は完全回復とまでは行かないものの日常の暮らしにはそれほど不自由を感じないまでになり、林さんも仕事の都合上横須賀通いを続ける訳にも行かなくなって二人の交流は次第に薄らいでいきました。この頃私の胸の中に沈潜した思いが冒頭に掲げた歌だったのです。私が肉体的にも精神的にも失意のどん底にあったとき献身的に治療にあたってくれ、力強く励ましてくれた林さんに酬いるためにも私の残された生涯を視覚障害者の方々のお役にたてたいとの気持ちが詠めているでしょうか。

私はそんな気持ちで「羽化の会」にも出席させて頂いているつもりですが高齢で障害をもつ身、しかもパソコンは素人同然。と来ては会員のみなさんの足手まといになっているのではあるまいかといつも気になっているのです。

本題のテーマとはかけ離れた身の上話になってしまいましたがわたしにとってボランティアとは「光なきひとへともしびを灯すこと」とでも言いましょうか。ご理解頂けたでしょうか。

最後に水原秋桜子の句を一句

余生なほなすことあらむ冬苺

（補足）

林さん（林昌正氏）は業界に尽くした功により平成二年黄綬褒章を授与されました。

なお平成八年病気で亡くなられた由、岡田さんからお聞きして知りました。

合掌

ボランティア活動には利用者がいる

会員　宗助　悦子

「ボランティア」と呼ばれるものには、色々な種類がある。一般には「社会に対する自発的な無償活動」「自分の出来る範囲で活動する」ということになるだろう。

確かに、自分の余暇を利用してそれぞれの活動に参加するのだが、対象者（利用者）の事を考えると、余暇だけでは不十分になってしまう。

例えば、在宅介護。　肢体不自由の人のボランティアや、お年寄りの食事サービス。「時間の都合が付かないから、お手洗いに行くのを三回ほど我慢して下さい。」とか、「食事は一食我慢して下さい。」などとは言えない。そこまで極端では無くとも、点訳活動も同様ではないかと思う。

点訳書が世に流通していれば、購入出来るが、現在の所その可能性はない。点字図書館等でも書籍は限られている。読みたくても読む本が無いのであるから、やはりボランティアが頑張らなければならない。

本だけでは無い。役所等に提出する書類は点字では提出出来ない。急いで提出しなければならないのに、ボランティアが「忙しいから出来ません。」と言ったらどうなるのであろうか？

これらを個人で対応することが出来ないため、ボランティア団体という組織が重要になってくる。それぞれの会員が、自分の余暇を利用して互いをサポートしながら、活動していくのが理想ではないかと思う。

しかし、なかなかそのサポートがうまくいかないのが実情のようだ。視覚障害者に限らず、難しい事や急ぎの場合にサポートがうまく行かずにボランティア団体から断られることもあるという。かく言う私も、昨年秋に、聴覚障害者のボランティアに参加していた。これは、今年の秋に横浜で開催される「かながわ　ゆめ国体」に募集してきたボランティアの人達に、聴覚障害者の為の「パソコン要約筆記」（話している内容をパソコンを使って入力し、スクリーンやパソコンの画面等に表示することによって、リアルタイムで情報を得ることが出来る）の講習を行い、当日は、現場で入力等をするためである。しかしながら、この一月から新しい職場に勤務することになり、当会の活動をする時間をとることが精一杯で、やむなくリタイアしてしまった。リタイアの意志表示をする際に、随分と悩んだ。少ない人数で構成されているので、メンバーが一人欠けてしまうことにより、他のメンバーに迷惑がかかる。更には、聴覚障害者にも迷惑が及ぶかもしれない。しかし、自分の身体は一つ。一日の時間も限ら

れている。どれも中途半端にするよりはと、決心した。
よく、ボランティア団体を抱えている組織では、ボランティアをする人の事を「ボラ」「ボラさん」「ボラ達」と言っているのを聞く。私の印象では、この呼称は前述のように、中途半端に投げ出したり、難しいことは出来ないと断ったりするボランティアの現状が反映しているような気がしてならない。全面的に期待はしていないという気持ちが現れているのではないかと思うのである。しかし、障害者他、利用者の声は一つも聞こえてこない。このような状況をどのように思っているのだろうか？　「ボランティアでお願いしているのだから、多少の事は我慢しなければ…」などと思っているのだろうか？　多くの方の声を聞いてみたいと思う。

話は変わるが、ここで、羽化の会における私の役割について少しふれてみる。一応名前は「総務担当」ということになっているが、いわゆる雑用係である。この機関誌の編集・例会の準備・勉強会資料や提出書類の作成等々…　細かいものが沢山ある。幸いにして会員がいい方ばかりなので、職場が変わり忙しくなった一月から、皆さんがサポートして下さっている。
知人に会の内容や私の役割を話すと、九割方「それって本当にボランティアなの？」という答えが返ってくる。「ボランティア」という言葉の一般的な認識から本会の活動も、私の役割もはずれているのだと思う。
しかし、ボランティアというものは、誰かがやらなければ、困る人が出てくるし、ボランティア団体を運営していく上では、雑用をする人がいなければ成り立たないということが見えていないのであろう。
知人の会社で、ボランティアを続けていく為に、仕事を辞めたという私より少し年上の女性の話を聞いたことがある。ボランティア活動は無償なので、生活はどうするのだろうか？などと、いらぬおせっかいだが心配した記憶がある。つまりは、そのくらいまでしないと、満足な結果は得られないということだろうか？
私はそこまでする勇気は無いが、出来うる限り、その見知らぬ女性に追いつきたいと思っている。

羽化の会に入るまでは、単発のボランティアばかりだったため、全く利用者との接触もなく、利用者の事を考えていなかったように思う。まさしく『自己満足』で終わってしまっていた。
聴覚障害者のボランティアはリタイアしてしまったが、羽化の会の活動は、多くの利用者の声を聞きながら、最後まで『自己満足』に終わることなく頑張っていきたいと思う。

連載　点字から識字までの距離（五）

山内薫（墨田区立緑図書館）

前回ご紹介した『読むということ』の中に「言葉の本来的な姿は、音声言語すなわち話し言葉であるといわれている。」という記述がある。私たちはこの言葉に何の疑いも持たないが、それでは生まれつき耳の聞こえない「ろう」の人にとって言葉とは一体どういうものなのだろうか。

『現代思想』という雑誌の一九九五年三月号に「ろう文化宣言」という記事が掲載された。この宣言の反響はかなり大きかったものとみえて、翌一九九六年の四月には同誌の臨時増刊として四〇〇ページを越える「総特集ろう文化」が刊行されている。今回は点字とは少し離れるが、この宣言を紹介してみたいと思う。究極は点字というものも言葉の問題と深く関わると考えるからである。

宣言のはじめに「『ろう者とは、日本手話という、日本語とは異なる言語を話す、言語的少数者である』これが、私たちの『ろう者』の定義である。これは、『ろう者』＝『耳の聞こえない者』、つまり『障害者』という病理的視点から、『ろう者』＝『日本手話を日常言語として用いる者』、つまり『言語的少数者』という社会的文化的視点への転換である。このような視点の転換は、ろう者の用いる手話が、音声言語と比べて遜色のない〝完全な〟言語であるとの認識のもとに、初めて可能になったものだ。」と高らかに宣言している。

最近の手話ブームの中でも、一般には「手話は、音声言語を使うことのできない人のための、〝不完全な〟代替品だと」考えられている。しかも「ろう学校では歴史的に、音声言語の教育が最大の目標と考えられてきた」ために「ろうの子どもたちに、一度も聞いたことがない音を発声させ、相手の話を唇の形から読み取らせるという、気の遠くなるような方法で、音声言語を習得させる試みが長く続いた。」「この口話主義のもとで、手話は弾圧され続け」「教育の場からは徹底的に追放されていた」。一八八〇年、ミラノで開かれた世界ろう教育会議での「口話が手話よりも優れていることは議論の余地がない」という決議によって、例えばアメリカではろう学校が口話主義を受け入れたために、ろうの教師は次々と解雇されたという。日本では一九三三年に当時の鳩山文部大臣が「口話を支持する訓辞」を述べたことを受けて、全国のろう学校が口話主義へと転換したという。

そして、現在でも、「ろう学校は依然として口話主義下にある。しかし、たとえ手話が禁止され、弾圧さ

れていたとしても、ろう学校がある限り、生徒集団による手話とろう文化の伝承は途絶えることがないだろう。」ところが最近、「ろうの子どもたちをろう学校に通わせず、普通学校に通わせようとする波と、その究極にあるろう学校廃止の動き」があるという。そうなると「子どもたちは、手話を修得する機会を与えられず、最悪の場合、自由に使いこなせる言語をひとつも持てなくなる可能性さえある。」「実際、イタリアでは、ろう学校全廃の構想が打ち出された。イタリアをはじめ、世界中のデフ・コミュニティーの大反対によって、ろう学校全廃という最悪の事態だけは免れたが、依然としてろう学校統廃合の動きは世界中で進行している」という。「デフ・コミュニティーは、耳の聞こえない子どもには、ろう学校が必要であると主張」しているが、ノーマライゼーションに反する動きとして、社会にはなかなか理解されない。

手話に関しても「日本語を話しながら手話単語を並べるコミュニケーション（これをろうの団体の人達は「シムコム」と呼んでいる）は、二つの言語を同時に話そうとする試み」で「二つの言語を同時に話すことは所詮無理なことであり」「きわめて不完全なコミュニケーション手段と言わざるを得ない。」と指摘している。このシムコムは国際障害者年をきっかけに飛躍的に広まったが、手話学習者もろう者自身も自分たちの手話が一人前の言語であるという認識がなく、手話を教えることは単語を教えていることだと当たり前のように考えられていた。つまり、「手話教育」とは「語学教育」だというという認識がまったくなかったために、手話学習者は日本語を話しながら習った単語を並べるように指導された。シムコムを学んだ学習者は、外国語の学習で単語だけを学んだ人のそれと変わらず、ろう者の話が理解できず、ろう者の話は支離滅裂で意味不明だし、彼らは手話さえも理解できないようだと誤解し、ろう者が自分自身の手話に対する自信と誇りを取り戻すことは困難だった。「シムコムは本質的に、ろう者にとって自然に修得できない言語、日本語にもとづいたコミュニケーション手段なのである。」「シムコムには熟達しているものの、日本手話は理解することも表現することもできない手話学習者が手話通訳者になり、」例えば「ろう者の日本手話を日本語へ翻訳する読みとり通訳では、通訳者が拾い読みした単語の列から、自らの想像で勝手な訳文を作り上げているとしか思えない事例がいくらでも見つかり」、「通訳者に対して、ろう者の生活をもっとよく知り、彼らの気持ちをくみ取る努力が要求され」、通訳者の中では「読みとり通訳という作業は、ろう者が

何を言いたいのか、その心をつかんで、ろう者が並べた手話単語の列を、筋の通った日本語にすること」と固く信じている人もいる。その人たちには、日本手話に独自の文法があるなど思いもよらないことなのだろう。」と、こういう状態が現在でも変わらずにあると宣言では述べられている。

一九九二年に八人のろう者と一人の聴者によって結成された自主グループ「Dプロ」の機関誌「D」の一五号に用語集が載っているのでいくつかご紹介したい。

「日本手話・・・日本のろう者が日常的に用いている言語。単語を並べる規則（文法）や、単語の意味・用法は独自のもので、日本語を手で表現したものではない。日本語の影響を受けているが、全ての言語は他の言語からの影響を受けるものであるから当然のことといえる。現在では、世界中のろう者が用いる手話は、複雑で洗練された構造をもち、人間の言語としての条件をすべて備えており、音声言語とまったく同等であることが、言語学者らの研究によって明らかにされている。」

「シムコム（Simultaneous Communication）・・・日本語と手話を同時に表現しようとしたもの。文法や単語の意味・用法は基本的に日本語のそれにしたがう。本来、耳で聞くことを前提とした日本語を、目に見える形に（しかも不完全に）変換したものなので、音声なしで読みとる人は、それを『解読』し、頭の中で日本語に再変換する必要がある。解読には大きな負担が伴うので、伝達速度を遅くするなどの工夫が必要。それでも、長時間の使用や、複雑なメッセージの伝達には限界がある。ただし中途失聴者などにとっては、充分な手段となりうる。」

「ろう者・・・『ろう者』とは一般には、生まれつき耳が聞こえない人、あるいは子どもの頃に耳が聞こえなくなったすべてを指す。しかし、日本手話の〔ろうあ〕という手話単語は、日本手話を日常的に用いる人たちの集団に属しているメンバーを、他の人たちから区別して指すのに使われる場合が多い。そこで私たちは『ろう者』という用語を、『日本手話を話す人たち』に限定して用いている。ろう者の中心は子ども時代に日本手話を修得する機会のあった人たち、つまり、ろう学校で子ども時代を過ごした人たちや、両親や兄弟がろう者という家庭に育った人たちである。」

今回の小文は『現代思想　臨時増刊　ろう文化』第二四巻五号所収の木村晴美＋市田泰弘　「ろう文化宣言　言語的少数者としてのろう者」によっています。なお、次回もこの問題を考えたいと思います。

ご報告

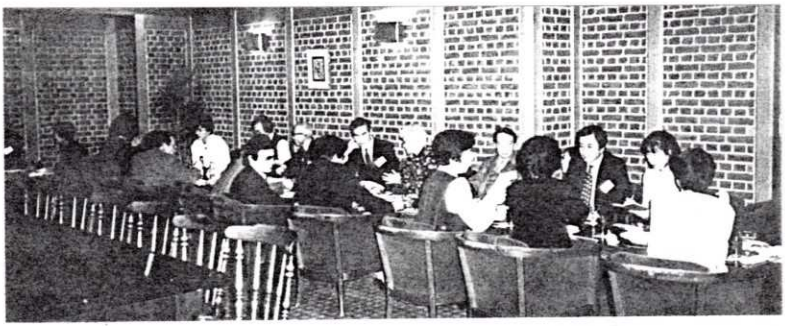
【新年会及び二周年記念の祝会が開かれました】

去る、一月二十五日（日）にホテルリッチ横浜『力車』にて、新年会及び二周年記念の祝会がささやかに行われました。

会員の他に、以下の方々にご参集頂きました。

この場を借りて御礼申し上げます。

横浜市議　大滝正雄先生、横浜市中央図書館サービス課課長　新谷迪子様、横浜市社会福祉協議会　ボランティアセンター課長　西尾敦史様、横浜市中央図書館サービス課係長　永井潤様、小学校教諭の伊藤邦博様、　緑図書館山内薫様、点訳ひかり会　斎藤寿美子様、東京漢点字羽化の会　鈴木雅文様

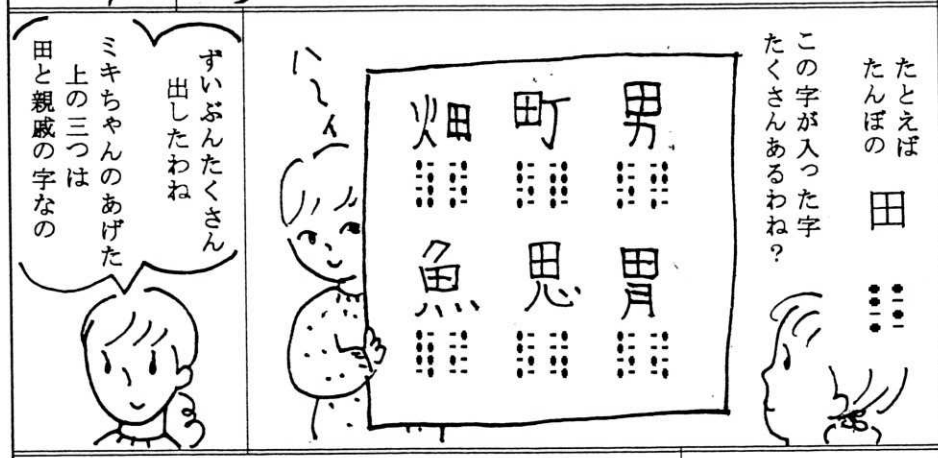


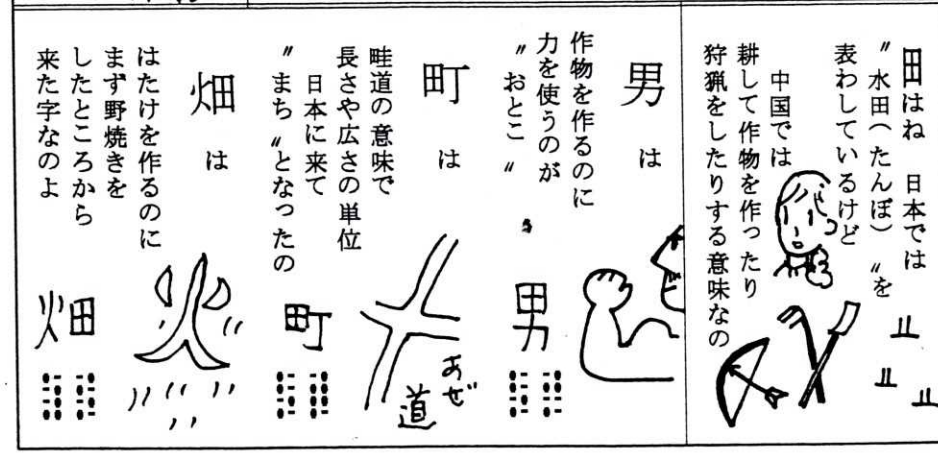
となりのシロー君（5）

住と往は兄弟か？

ええっと おうふくの 『おう』
ええ？ 『おう』なの？ それじゃ全然 ちがうね
アレ？
じゃあ この 主は なんなの？
往
そう！ これね 実は 『主』じゃないのよ
え？ だって これ『主』と おんなじよ！
先に答を言うわね これはね 上の点が 〃人の足〃なの
往
えっ じゃあ下の字は 王様の『王』？
へえ！前にもどちゃったね 主と王は よく似ているけど もとは違うんだって
そうなの ミキちゃんの言うとおり 下は『王』なのよ 住の主と 住の主は 形は同じでも もとは違う字なのね
往（おう） 住（じゅう）
↑ 主（ともし火と台の形）
↑ 王の上に足
『王』って どんな意味の 字なの？
天
天と地の間に 人が大きく 足を開いて 立っている形 なんだって
『大』に近い字ね
そしてね この 往は 右側だけで 〃ゆく〃という 意味があるの
往く年る
来
それに『彳』が付いて 〃ゆく、むかし〃などの 意味になっていったのよ

ねえ、漢字って違う字なのにもとが近かったり
似ているようで全然ちがう
OU
SHU
ZHU
THU
往
注
すごーく似ていてももとは全く違っていたりするんだね！
そういう字他にもあるの？


たとえばたんぼの田
この字が入った字たくさんあるわね？
男
町
畑
胃
思
魚
ずいぶんたくさん出したわね
ミキちゃんのあげた上の三つは田と親戚の字なの


田はね 日本では〝水田（たんぼ）〟を表わしているけど
中国では耕して作物を作ったり狩猟をしたりする意味なの
男は作物を作るのに力を使うのが〝おとこ〟
町は畦道の意味で長さや広さの単位
日本に来て〝まち〟となったの
畑はたけを作るのにまず野焼きをしたところから来た字なのよ
あぜ道

でもね あとの三つは 『田』とは 関係ないの
胃の田は 袋の中に食べたものが たくさん入った形 つまり胃袋 そのものなのよ
思の田は 頭蓋骨を表わしていて 頭と心の働きで 〝おもう〟ことが できると考えたのね
上から見た形
最後の 魚は 漢点字には田は 入っていないわね 墨字では 真ん中のところが 田になっているのよ
ミキちゃん この字 横に向けてみて
あっ、おさかな! 尾がひらひら していて 金魚みたいだわ
で、田は どんなふうに 見える?
ええっと カタカナの 〝ク〟のところが 頭よね
てんてんのところが 尻尾だから 田の部分は からだかな
うん うん
体のなに?
骨 カナ?
ピンポンピンポン! どう? 〝田〟の形も 色々なところから 来ているのよね
つづく

形声文字をつかめば漢字がわかる

形声文字＝部首＋音記号

小学校教師　伊藤　邦博

私は今、六年生を担任しています。子どもたちは六年の学習のまとめに大忙しです。

漢字ももちろんまとめの学習をします。そのねらいは、形声文字の構造をつかむこと。

中学校に進学しても、自分で漢字を学んでいけるようになって欲しいという願いを込めて、授業をつくらなくてはと思っています。

ところで六年生で学ぶ配当漢字は次表のような一八一字です。

異	遺	域	宇	映	延	沿	我	灰	拡
割	株	干	巻	看	簡	危	机	揮	貴
供	胸	郷	勤	筋	系	敬	警	劇	激
権	憲	源	厳	己	呼	誤	后	孝	皇
鋼	刻	穀	骨	困	砂	座	済	裁	策
至	私	姿	視	詞	誌	磁	射	捨	尺
収	宗	就	衆	従	縦	縮	熟	純	処
除	将	傷	障	城	蒸	針	仁	垂	推
寸	盛	聖	誠	宣	専	泉	洗	染	善
奏	窓	創	装	層	操	蔵	臓	存	尊
宅	担	探	誕	段	暖	値	宙	忠	著
庁	頂	潮	賃	痛	展	討	党	糖	届
難	乳	認	納	脳	派	拝	背	肺	俳
班	晩	否	批	秘	腹	奮	並	陛	閉
片	補	暮	宝	訪	亡	忘	棒	枚	幕
密	盟	模	訳	郵	優	幼	欲	翌	乱
卵	覧	裏	律	臨	朗	論			

（表1）

この配当漢字一八一文字の分類は、次の通りです。

象形文字　二〇字（一一％）
会意文字　五一字（二八％）
形声文字　一〇九字（六〇％）
仮借　一字（〇・二％）

授業は次のような流れで進めていく予定です。

①はじめは音記号の復習です。

坂　飯　阪　販

坂　飯　阪　販　はすべて「ハン」と読み、この四つの漢字に共通な形は「反」であり、この「反」のように漢字に共通の音を表す部分を音記号ということを

再確認します。

②次に表1の六年生配当漢字の中から、今までに学習した音記号を持っている漢字を見つけだし、音記号と形声文字を結び付けます。音記号と形声文字を別々に書いたカードを用意し、黒板に貼り付けながら、これを結びつける作業をワイワイ騒ぎながらゲーム的に楽しみます。

次の組み合わせは単体の漢字が音記号になっている形声文字です。訳…尺　宙…由　城…成　署諸…者などは音がゆれて読み方が変化していますが、何となく似ている響きです。

閣…各、　株…朱、　簡…間、　吸…及、　供…共
警…敬　源…原、　誤…呉、　紅…工、　座…坐
姿…次、　視…示　詞…司、　誌…志、　捨…舎
縦…従、　縮…宿、　署諸…者、　訳…尺、
除…余、　障…章、　城盛誠…成　洗…先、
創…倉、　層…曽、　臓…蔵、　担…旦、　値…直
宙…由、　忠…中、　頂庁…丁、　賃…任、
糖…唐　認…忍、　批…比、　秘…必、　訪…方
忘…亡、　優…憂　裏…里、　熟…孰、　潮…朝

（表2）

漢字の一部を使ったり、漢字を変形させたり、漢字のかけらを音記号として使っている漢字もあります。

裁…戈、通…甬、晩…免、腹…复、補…甫
模幕暮…莫、朗…良、論…言

（表3）

③この後で、表2、表3の音記号と同じ音記号を持つ漢字集めをします。子どもたちは合格の格、栽培の栽、などといいながら辞書を片手に喜んで探しだすでしょう。

④次に漢字の引き算をします。例題として、音記号が「包（ホウ）」の五つの漢字を使います。

砲—包＝石　（いしへん）
飽—包＝食　（しょくへん）
抱—包＝扌　（てへん）
泡—包＝氵　（さんずい）
胞—包＝月　（にくづき）

形声文字から音記号を取り去ると部首が残ることを

見つけます。

それぞれの漢字の意味を部首と関係づけながら考えさせたり、調べさせたりします。

・砲は昔石を飛ばした武器
・飽は食べ飽きること
・抱は手で抱くこと
・泡はあわ。水の泡
・胞。おなかの中で赤ちゃんを包む

子どもたちは、五つの「ホウ」の漢字のそれぞれの部首が漢字の意味を暗示していることにあらためて感心するでしょう。

⑤表2の形声文字から音記号を抜いて部首を取り出します。「もんがまえ」「きへん」「たけかんむり」など、得られる部首は次のようになります。

門 木 竹 口 亻 言 氵 糸 广 女 礻 扌
罒 阝 土 刂 尸 月 宀 心 丁 貝 米 禾
衣 灬

⑥そして同じ部首を持つ漢字を集める学習をします。

ここでも子どもたちは、漢和辞典を使って楽しくたくさんの熟語をさがすはずです。

⑦この学習の仕上げとして漢字の十字路をつくります。

漢字は音記号をもとに次々に仲間の漢字を増やしていきました。次の図を使って漢字の十字路について説明します。縦に音記号工「コウ」の漢字を並べます。横には部首「むちづくり」を持つ漢字を並べます。攻の字は音記号「工」通りの部首「むちづくり」通りの交差点に位置する漢字と見ることができることを理解させます。

放
―
功―紅―攻―江―項
―
政

形声文字はその一つ一つが十字路の交差点に立っている漢字であるといえることこそ、子どもたちにわかってほしいことなのです。

さらに発展させて、漢字の広場を作ろうと呼びかけます。

次の広場の図を黒板に掲示し、『漢字の広場をつくろう。』と呼びかけます。

音記号「包（ホウ）」の字を使うと、さらに次のような漢字の広場ができあがります。中央縦に音記号「包（ホウ）」を持つ漢字の仲間を、横に上から順に

砂―飲―持―汗―肺
―　―　―　―　―
砲―飽―抱―泡―胞
―　―　―　―　―
岩―飯―打―池―胃

部首「いし」「しょくへん」「てへん」「さんずい」「にくづき」の漢字を集めてみると、五つの交差点ができ、そこには五つの形声文字が位置していることがわかります。

たちまち漢字の広場ができあがります。

こんな説明をした後で、子どもたちに自作の漢字の広場をつくってもらいます。子どもたちは意欲的にこの課題に取り組むことは間違いありません。たくさんの、漢字の広場ができあがるでしょう。それを虫食いのようにすれば、漢字の問題集ができ上がります。印刷すれば、またまた遊べます。

小学校の配当漢字千六字の中の五百字以上、つまり約半数は形声文字です。常用漢字となるとその比率は高まり八十～九十％は形声文字にあたります。形声文字は漢字全体の大多数を占めているのです。形声文字の構造を知れば、漢字の学習は苦痛ではなく、楽しいものになるのではないでしょうか。

形声文字とは、音記号部分をもった合成文字です。音記号をとらえることができれば、後は必然的に残りの部分が見えてきます。残りの部分とは要するに意味記号＝部首になります。その他には何もありません。何ともすっきりした構造です。

一方、部首は漢字の意味的なグループの旗じるしになっています。

漢字の十字路や漢字の広場を学ぶことで子どもたちは、漢字は部首や音記号を親にして、たくさんの仲間の漢字をつくってきたことと、漢字を生み出し、法則に則って、漢字を増やしてきた中国の古代人の知恵に感動すると思います。

この授業で私はなんとしても、この素晴らしい漢字の仕組みを子どもたちに伝えたいと思っています。

私はこれからも、漢字の学習を単なる書き取り主義で子どもたちに苦行を強いるのではなく、子どもたちの知的好奇心を満たし、子どもたちが面白がって追及できる授業を創造していくつもりです。

☆コーヒーブレイク…面白い会意文字の話

祭　と　祭　どちらが正しい？

会意文字とは、どの部分も音を表さず、意味だけを表す記号（部首）から成り立っている漢字をいいます。

会意文字は、分解をしていけば意味がすっきりつかめます。

よく、祭　という字を　祭　と間違えて書いてあるのを目にます。

祭りを分解して意味をとらえれば

祭
- 又　手を表します
- 示　示すは神を表します
- 月　ニクヅキで肉を表します

意味は　祭りは手で肉を神棚にささげることとなります。祭りの本質を表していると思いませんか。

朝も面白い会意文字です。分解してみると、

朝
- 月　ムーンの月です
- 日　太陽です
- 草　草

意味は、草原から日がのぼり、月は残月です。

看護の「看」もこれまた会意文字です。

看

＝　手＋目

意味は、手を目の上にかざしてみること。

気分の悪い人がいると私たちはすぐにおでこに手をやり、熱があるかどうか確かめます。そういえば、最近は問診と機械を使って検査するだけで投薬をするお医者さんが多くなりました。聴診器を当てるのが好きでないお医者さんがいるとか。お医者さんて患者さんを看る人ですよね。

同報通信『雑談』より　4

会員　西　淳策

「雑談」お久し振りです

この間仕事の関係で成田に行く機会がありました。約束の時間に合わせて乗ったつもりでしたが、一時間も早い電車だったことに途中で気がつきました。またもや、老化ボケに加えてエジプトボケかなと我ながらあきれはてました。まあ遅い方に間違えなかっただけよかったというものです。

昼からの訪問でしたから、昼飯をどこかでとってからとの予定でしたが、いかにもまだ早く、しょうがないから食べ物屋を探しながら町の様子でも眺めてみようと歩き始めました。ところが道には意外に多くの人が流れています。よく見るとところどころに幟があって、成田山への沿道であることに気がつきました。ここは始めてでもないのに、無信心の私にはこれまで全く意識がなかったのです。寺までどの程度離れているのかもわかりませんでしたが、とにかく行ってみよう、遠ければ途中で引き返せばよいと、成田山へと向かうことにしました。

この門前町の両側には昔からの古い店々が連なりま

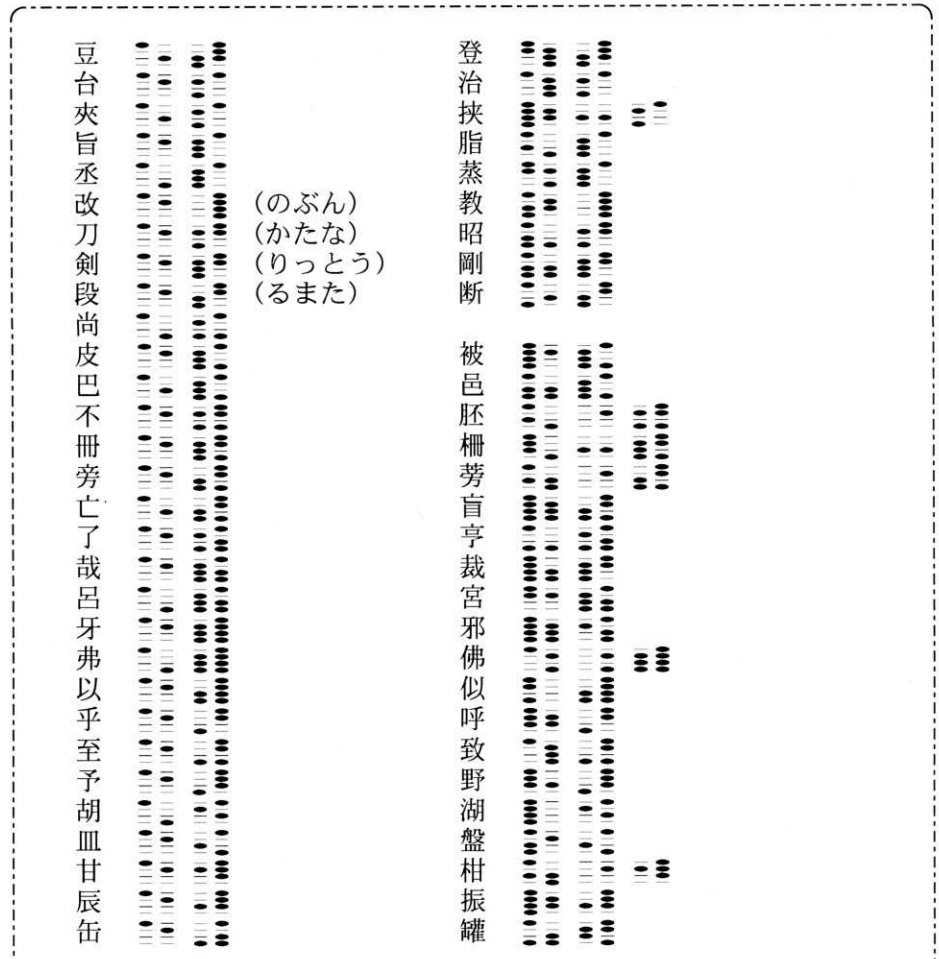
す。この周辺の産物である落花生や各種漬物、つくだにや海産物など、温泉とかの観光地とは違って、実質的なものが多く、市場に近い雰囲気です。これに参詣者をあてこんだ、そば屋、てんぷら、うなぎの蒲焼きなどの飲食店が間を埋めています。魚やらを焼いて試食させて売る活気のある声がとびかい、食欲をそそる匂いが充満しています。

成田不動にはゆっくりあるいても一五分程度で着きました。丁度よい距離でした。まだ初詣らしい人達の中に混じって、お参りすることになった訳です。ゆきがかり上僅かなおさい銭を投げ、自分に照れながらも参拝に至りました。牛に引かれてではないが、たまには参詣せよとのご本尊のお導きかも？

帰り道、つぎつぎと参拝に向かう人々と向かい合うことになって、自分のゆっくりした気分もあったのでしょうが、なにかいつもと違った安らぎのようなものを感じたのです。何だろうかと考えてみて気がつきました。例えば横浜の繁華街などを歩いて感ずるのですが、周りの人の波はほとんどが一〇代、二〇代の若者達、自分のような老年には場違いのような違和感をおぼえます。ところがこの参道はまさに年配の人々で溢れています。しかもどう見ても田舎っぽい庶民的な、いわゆる善男善女です。私はかつての懐かしい日本の風景の記憶を呼び覚ます雰囲気にほっとし、おもわず心がなごんだようです。そう、これは例の「寅さん」の舞台、柴又に出てくる町並とそこに行き交う人達の光景に重なります。怪我の功名でしょうか、お蔭さまでよい時間を過ごすことができたのです。

さて、ゆったりと昼食をとって、約束の時間通りに本来の用事の相手先を訪ねることができました。ところがなんと、当のご本人にすっぽかされてしまったのです。その上司に会ってなんとか用は足りたのですが、当然ながら陳謝しきりでした。ですが不思議なくらい頭にはきませんでした。どうやらひとつは自分のヘマもこれに比べればずっとマシだということ、ましてや相手は私より二回り位若いのですから、自己嫌悪も薄らいでほっとしたからでしょうか。そしてもうひとつ、平安の心をもたらしてくれたのは、お不動さんのご利益なのかも知れません。

焚香に蒲焼きただよう寒不動



最後に、部首として大変大きな働きのある文字で、これまでに符号化できなかったものがあります。これらは、仮名点字の発音そのものを使って表わしたので、「発音文字」と呼んでいます。以下のようです。

円（エン）
鬼（オニ）…魂
告（コク）…浩
事（コト）
生（セイ）…産
争（ソー）…浄
対（タイ）
拝（ハイ）
反（ハン）…坂
民（ミン）…眠

大変な駆け足でご紹介して参りましたが、如何でしたでしょうか。

漢点字ってどんな字？　５

漢点字の構造について、最後のお話になります。

前回は、部首としては主に偏になる漢点字をご紹介しました。今回は、漢字の身体の部分、形声文字では「音符号」として用いられる漢点字をご紹介します。前にも幾つかの漢点字（可⠅⠕、寸⠉⠥、己⠚⠥など）をご紹介しましたが、部首の数はまだまだ沢山あります。そこで、１マス目に４、５、６の点の何れかを前置した漢点字が出来ました。川上先生はこれを「傍側文字」と呼んでおられました。ますます、一つの点符号に与えられる役割が多くなります。

離	⠐⠗	（ふるとり）	推
井	⠐⠊	（いげた）	
及	⠐⠁		扱
凡	⠐⠋	（きにょう）	汎
亦	⠐⠔		
又	⠐⠥	（また）	努
干	⠐⠚		刊
朱	⠐⠱		侏
瓦	⠐⠝	（かわら）	瓶
其	⠐⠫		期
莫	⠐⠍		漠
失	⠐⠎		
共	⠐⠅		供
呉	⠐⠓		誤
印	⠐⠉		節
巷	⠐⠵		港
乍	⠐⠷		作
申	⠐⠯		神
曳	⠐⠽		洩
臣	⠐⠻		監
毛	⠐⠛		毳
曽	⠐⠩		層
且	⠐⠏		祖
丑	⠐⠹		
也	⠐⠜		池
采	⠐⠲		彩
庄	⠐⠳		粧
尭	⠐⠣		暁
専	⠐⠞		磚
亭	⠐⠟		停
長	⠐⠇		髪

人と遂に死ねずじまひや木の葉髪（コノハガミ）

鈴木真砂女

冬、木の葉がしきりに散るように人の頭髪も年をとって抜けやすくなることを俳句の季語に取り入れたのが「木の葉髪」。
作者の真砂女さんは当年９２才、いまも銀座の小料理屋の女将（オカミ）として店をきりまわしているだけでなく、俳句界でも活躍していることは世に知るところ。これははげしい恋の句。妻子ある人との恋に一時は心中も考えたがそれも果たせず木の葉髪となるこの年になってしまった。（朔）

火の気なき炬燵の上の置手紙

岸田眠女（ミンジョ）

「いろいろお世話になりました。お幸せに」とでも書かれた置手紙を手に呆然と立ちつくす亭主の姿が目にうかぶ。このおそろしい俳句の作者は「眠女」こと岸田今日子さんとは。（朔）

編集後記

新しい一年が始まりました。本機関誌も創刊から一年が過ぎようとしております。皆様のご協力に深く感謝致しております。

第五号に掲載されている「連載　点字から識字までの距離」の中に書かれている、『点字を左右どちらの手で読むか』について、テープ版機関誌「うか」の読者より、お返事を頂戴致しました。盲学校で点写の指導を受けたため、仮名点字も漢点字も左手で読まれているそうです。右手ではやはり読めないそうです。ご連絡頂きありがとうございました。他の方々からのご意見をお待ちいたしております。

「代表インタビュー」は休載させていただきました。

次回の発行は四月十五日、三月に横浜市中央図書館に納入する点訳書他、完成した作品をご紹介いたします。ご意見・ご感想をお寄せ下さい。

ＴＥＬ・ＦＡＸ　０４５（２６１）１７２３
宗助　悦子

連載　EIBRK漢点字変換システムについて(6)

木下　和久

この連載も６回目となり、一通りの説明はすんだつもりですが、いろいろな方からの質問の内容を見るとまだまだ説明が不十分で、内容が理解されていなかったり、説明が抜けていたりするものだと感じます。そこで、しばらくは順不同で目についた疑問事項をそれぞれ説明してみたいと思います。

１．DBLCONV の使い方

漢点字変換用のテキストファイルは、必ず全角文字で入力していただくようにしています。それでも、ついうっかりスペースを半角で入れたり、また最初からこの目的で入力したものではないものを漢点字変換に使いたいというような場合には、沢山の半角文字が入っていたりします。そのような場合、変換する前に半角文字をすべて全角文字に変換した方が好都合です。そのためのツールとして、DBLCONV が作られました。

半角文字を全角にするとき、無条件にそうしてしまいますと、問題が生じることがあります。それは、点字を直接入力するときに、16 進コードを使った場合などです。EIBRK では、16 進コードは半角の英数字の組み合わせで表すことにしています。そのために DBLCONV では 16 進コードとして使われる可能性のある０から９までの数字と、A から F までの英字(小文字も含む)は、全角への変換からはずすようなモードと、例外なく全角へ変換してしまうようなモードと、２種類の変換モードを用意しています。EIBRK では、その他に"@"と半角の数字を組み合わせて下がり数字に変換するような使い方もしていますが、このような場合は、どちらのモードでも全角への変換をしないようにしています。また、「半角 16 進コードはそのまま」のモードでも、半角の英数字が奇数個の場合は最後の１個は全角に変換します。また、半角のスペースは２個を全角スペース１個に変換します。

したがって、DBLCONV を使うときはこのモード選択について、考えておかなくてはなりません。上述の例でいうと、後者の「例外なく全角へ変換する」のが変換モード１で、前者は変換モード２です。プログラムが立ち上がった最初は、変換モードは「１」になっています。ただし、この「１」の内容が、実は古いバージョンと新しいバージョンでは反対になっています。最近バージョンアップした覚えのない方は、最初の画面でこれを確かめてください。

画面の一番上に、「変換モード = 1」とあって、その次に(すべての英数字を全角にする)と書いてあれば、新しいバージョンで、古いバージョンの場合は(半角16進コードはそのまま)と書いてあるはずです。

今、ご自分が変換しようとしているファイルが、16進の点字コードを含んでいなければ、(すべての英数字を全角にする)の方が良いわけです。もし、自分の意図するようなモードになっていない場合は、ファンクションキーの f.9 を押してください。もう一方のモードに切り替わり、その内容が画面に表示されます。この f.9 が有効なのは、最初の時だけで、一旦ファイル名を入力し始めてしまうと、もうモード切り替えはできなくなってしまいます。ファイル名を入れてしまってから間違いに気がついた場合は、残念ながら後戻りができません。STOP キーも ESC キーも利かないのです。その時は、仕方がないので現実に存在しないファイル名を入れて、続けてください。そうすれば「ファイルが見つかりません」といってプログラムは終了します。

さて、初心者の方は、この「DBLCONV を使う」という所で引っかかることがあるようです。簡単にいうと、DBLCONV を使うには「DBLCONV ﾘﾀｰﾝ」と入力すればいいのですが、その場合に「コマンドまたはファイル名が違います」といって動かないことがあります。この時、画面のカーソルのある所に現れるパス名に注意してください。たとえば、これが「A:¥TENJ>」となっていれば大丈夫です。そうでなくて、「A:¥>」などとなっている場合はたいていだめです。このようにカーソルがある場所のパス(サブディレクトリー)が、実際に DBLCONV というプログラムが入っている場所でないとそのプログラムは使えないのです。カーソルがどこにあっても DBLCONV が使えるようにするためには、「PATH=A:¥TENJ;‥‥」というコマンドが AUTOEXEC.BAT の中に入っていればいいのですが、初心者の方はこの辺になると妙にしり込みなさいます。というわけで、ここでは A:¥TENJ>のあとに DBLCONV を入力するということにします。

プログラムが立ち上がったら、まず先ほどの変換モードを確かめてください。これが正しければ、入力ファイル名を入れます。ここで注意しなければならないのは、そのファイルのある場所(パス)です。もし、フロッピーディスクに入っていて、そのドライブが B:の場合はファイル名の頭に B:をつけます。また、そのファイルが A:¥doc にある場合は A:¥doc¥をファイル名の頭につけます。

次に、出力ファイル名を聞いてきます。これは省略することができますが、そうすると入力ファイルそのものの中身が新しく書き換わります。これで問題がない場合はいいのですが、もし全角への変換がうまく行かない時のためとか、元のファイルはそのまま残しておきたいような場合は、入力ファイルと違った名前をここで指定します。

この場合もパス名に注意してください。パス名をつけないと、新しいファイルはプログラム名を入力した時にカーソルがあった場所に作られてしまいます。

2．改ページマークについての注意事項

１ページ分まるまる白紙にしたいような場合、本文があるページの最後を改ページで送り、続けて改ページマークを入れると、改ページマークが同じ行に重なって挿入され、そのために２つ目の改ページが無効になってしまいます。これを避けるため、最初の改ページの後、空行を１行挿入して、その改行マークより先にカーソルを置いて改ページマーク（CTRL-P)を入れてください(改行マークの位置で改ページすると、改ページマークが上の行へ行ってしまいます)。改ページは、一太郎のバージョン４では CTRL-P で簡単に挿入できますので、これを利用するのも良いでしょう。

一般的な注意事項として、この改ページは、プログラム上かなり複雑な処理をしています。少し立ち入って説明しますと、改ページマークの入った位置がファイル全体の中の何行目かということを記録した表を、変換されたファイル(.TXZ　という拡張子のファイル)の最初の部分に書き込んでいるのです。そして、今の所そのデータの数は最大 20 個までとしています。そのために、1 つのファイルで 20 個を超える改ページマークがあると、その位置を記録しきれませんので、超えた分は無視されてしまいます。これを変更するにはファイルの設計を変えなければならないので、古いバージョンとの整合性などの問題があって難しいものがあります。どうしてもそれが必要な場合が生じた時は、プログラムの変更を考えましょう。

現在のままで 20 個を超える改ページマークが入った場合は、どうなるかといいますと、画面上で改ページの表示が出ないことと、そのために最初から 20 個を超えた分の改ページによるページ数の管理ができないので、印刷する場合のページ数の指定などは、狂ってくることになります。しかし、印刷すれば改ページのところはちゃんと改ページされ、ページ数の表示も正常に行われます。

3．Windows95 への外字登録

前号で Windows 用の外字ファイル TBGAIJ.TTE と TGGAIJ.TTE の登録の仕方を説明しました。その場合に、これらのファイルをどこにコピーしたらいいのかという質問を受けました。答えは簡単です、つまりどこでもいいのです。

ハードディスクの中なら、どこへコピーしても(どのフォルダーへコピーしても‥‥フォルダーというのはサブディレクトリとかパスとかいうあれです)、.TTE ファイルを選ぶ時に、そのコピーしたフォルダーを選べばいいというわけです。どこでもいいといっても、なるべくなら決まっている方がいいとおっしゃる場合は、A:¥ Windows¥Fonts あたりがいいでしょう。ここにあると、ファイルを選ぶ画面になった時、最初に画面に出てくるリストにそのフォルダー名が出てくるからです。

4．編集画面での文字入力について

EIBRK の変換後の編集画面では、f.1 で文字が直接入力できるようになっています。これはその場ですぐに点字に変換されるので、大変便利なものです。しかし、ここで入力された文字は、変換する際にその前から続いている文字との関連を見ていません。たとえば、その前の文字がカタカナであれば、カタカナを入力した時にあらためてカタカナ符をつける必要はありませんが、カタカナでなければカタカナ符が必要になります。これは外字符や数符等も同様で、いろいろ複雑な規則がからんできます。そのために、原則として数符やカタカナ符などの特別な符号はつけないようにしています。ですから、変換された結果は、単に参考にとどめ、その後必ず再変換をして、本来の姿にしてください。

入力された結果がその場で変換されるといっても、それは入力が完了してからです。「完了」とは漢字変換が確定した後でリターンキーが押された時です(漢字変換の確定のためにリターンキーを押すので、更にリターンキーを押すことになります)。最後のリターンキーを押さないで、点字が出てこないといわれる方がおられるようです。カラー画面の時は、この入力が完了するまでは入力文字は黄色になっているのですが、モノカラーのノートパソコンの場合はわかりにくいかもしれません。

5．その他

印刷設定は編集面のオプションで設定する場合と、「6.印刷」で設定する場合がありますが、これはどちらも設定した時点でファイルに保存されるので、違いはありません。ただ、印刷画面で指定する印刷開始ページと終了ページは、ファイルには記録されません。

次回は、ページ見出しの作り方の具体的な方法、新旧ＪＩＳのチェック方法等についても説明する予定です。その他、日頃疑問に思っている内容について、どんどん質問を出してください。皆さんの参考になりますので、ここで取り上げたいと思います。